
隠されし宝石の物語

瞬火終刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠されし宝石の物語

【Nコード】

N4740K

【作者名】

瞬火終刀

【あらすじ】

昔々

今は7種類の七煌宝樹

それがまだ8種類だった頃・・・

プロローグ（前書き）

好きなので書いてみました。完全に趣味で自己満足できればそれでいいという小説です。文才なんてものは1mmもないので、不愉快になる方がいるかもしれません。そういう方は、即効戻ってください。それでもいいよって方のみご覧ください。

プロローグ

昔々

今は7種類の七煌宝樹

それがまだ8種類だった頃

この世界はとても平和でした

人とエディルレイドが共に暮らし

エディルレイドを武器として使用する事もない

そんな時代がありました

ところが、そんな時代は一人の人間と一人のエディルレイドによって壊されました

その人間は、信じられない能力を持ち、人間達に畏れられ

またエディルレイドは、一族では、否、エディルレイドには、ありえない特異な存在で皆に忌み嫌われていました

そんな二人が出会い、彼女の一族を滅ぼし

闇に消えました

以後数千年その二人を見つけた者はいません

また、彼女の一族に関する記述は、ほぼ残されていません

『古代の書物』の一頁参照

3 / 23 投稿（前書き）

短いです

3 / 23 投稿

「くああああ、寝た寝た」

「ゼロ遅いです」

上から覗き込んだのか、目の前に二つの虹色の目
まあ、虹色といっても光の反射で七色に見えるだけだが・・・

「おお、済まん済まん。リズ待ってたのか？」

「私も今起きた・・・よ？」

そう言うてはいるが、どう見ても準備万端なリズ

「嘘つくなよ。準備万端じゃねえか」

「社交辞令？」

「使い方間違ってるような気もするが、まあいい。そろそろ出発の
時間だ。準備はいいか？」

リズが謝罪している間に手早く着替えたゼロ

「OK、というかゼロ待ち」

「よし、行くか」

そして、二人は次の街ラズフェェアンクルに向かった

3 / 23 投稿2

スタスタスタッ

「ちよつと、ゼロ」

「ん？何だ」

肩で息をしながら呼び止められる

「ハアハア、まだ・・・着かないの？」

「あと少しだ」

「さ・・・つきから、ん、それ・・・ばっかりだよ？」

「どうした、休憩するか？」

「したいかも？」

「そうか」

はぁ、本当にもう少しなんだが、まあいいか
そうして、邪魔にならないように道の端に座る

「で、次の街に何があるの・・・？」

「賭博場。んで、今の資金を数倍に増やす！...！」

「ふうん、また負けるの？学習力ないねえ。まあ私には関係ないし買物でもしてるわ」

呆れたように言うリズ

「残念ながらその願いは却下だ」

「え？どうして？」

「リズの『力』が必要なんだ」

「・・・私の『力』・・・？」

「そうだ、その賭博場はエディルレイドを使って戦うらしい」

「えっ！？でもでも、ゼロが傷つくよ」

実際にリズの『力』を使うと常人なら間違いなく死ぬ。まあ俺には関係ないことだし、ひどくても数日寝込むだけだし、

「別にそれは気にしなくていい」

「いいよ。でも条件がある」

「条件？なんだ？」

リズの条件には実質不可能に近いこともあるからなあ。どうしようか・・・

「う〜〜〜んと、それはねえ、ここから次の街までおぶって？」

「そんだけでいいのか？抱き方は、おんぶ？それとも、お姫様抱っこ？」

「普通におんぶで・・・」

まあラズフェィアンクルまでは、本当にもう少しだしなw

「了解!!」

「やった〜」

「よし、ならもう行くか」

「うん」

出発しようとした時、何処からか

ブロロロ・・・

「バイクの音だな」

キイイイ

目の前にボロボロのバイクが止まる

そして、跨がっていた男がこちらに向かってくる

「よおヴォル、久しぶり」

「久しぶりだな、ゼロ」

「ところで、お前の愛車^{ヴァイヴ}どうしたんだ？ま・・・まさか、転倒^{コケ}たのか！？」

フルフルフル・・・

なぜか、震えてるヴォルクスが話そうとするより早く、小さいのがヒョコつと出て来る

「ダメなのヨ！その話はしない方がいいのヨ」

「久しぶりチルル」

「久しぶりなのヨ！ゼロ、リズ」

「チルル邪魔だ。消え」・・・いや、リズと遊んでいろ」

「リズ、チルルのお守り頼んだ！！」

「任しといて！！ウフフフ・・・」

なぜか意味深に笑うリズ

「リズ変な声漏れてるぞ？」

「はっ！？じゃ・・・じゃあ逝^{ハヤ}ってくるね」

不吉な誤変換があつた気がするが、気にしないで置こうw

二人が遊びに行った後

「ヴォル、何かあったのか？」

「何がだ」

「チルルに対する態度が優しくなったよな。何かあったと思ったんだ」

「ああ前の街でな」

その後、何かあったかなどを聞き、情報を交換したりしていた

途中何度か、リスの奇声とチルルの悲鳴が聞こえてきたが・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4740k/>

隠されし宝石の物語

2010年10月11日04時34分発行